

林 陽三先生の思い出

林先生が去る月 3 日にお亡くなりになった(1982 年)。73 歳だった。

6 日に告別式があった。その朝、大学へ行くと、急用に付き電話されたしとの伝言があり、直ぐに出発して 4 時に立川のお宅に着いた。4 日にお電話くださったが不在だったので知らせが遅れ、当日になって大野君が気付いて電話してくれたとのことだった。

初七日の法要が始まっていた。腸閉塞で入院なさっていたが、腹膜炎を併発したのが直接の原因であった。癌もできていたらしいが、最後まで苦痛はなく安らかであったとのことで、本当に良かったと思う。

林先生が群馬県立館林高等学校に非常勤講師として赴任されたのは、僕が 2 年の秋だった(1952 年 9 月)。週二日、数時間の授業を持たれたのだと思う。僕のクラスの「物理」は武川先生が教えておられた。修学旅行の記念写真の中央に武川先生がおられるところを見ると、先生は当時のクラス担任でもあったようだ。林先生とは物理学校の同窓で旧知の間柄であった。

風呂敷包みを小脇に抱えて館高の前の埃っぽい県道を、少し背を丸めてテクテク歩いてくる林先生を目にするようになった。赴任するや否や先生には”ガンジー”というニックネームが付いた。物理研究部の赤井や大隈などが広めたもので、同部の顧問だった武川先生の口から昔のニックネームが伝わったらしい。目端の利く赤井のことだから、写真で見る聖ガンジーに全くそっくりの風貌からすぐに連想したのかもしれない。

先生が赴任なさって間もなくの 10 月ごろだったろうか、林先生の家へ物理を教わりに行こうと話をもちかけたのは、同じクラスで席も近く、親しくしていた新藤(友男)だった。登下校時や家業の八百屋の手伝いで自転車に乗っているときに、先生の一人娘で当時中学三年生だった和子さんに会ったのがその動機の一つだったらしい。クラスの萩原、関田、村田を誘って 5 人で、土曜日の夜、8 時ごろから深夜まで、物理学と数学を教えて頂くことになった(村田は少し遅れて参加したのかもしれない)。

本田光太郎の「物理学本論」(内田老鶴圃刊)と岩波全書の掛谷宗一著「微分学」と「積分学」を読んだ。終わるのは 12 時過ぎになることも多く、あまり遅くなったときは、そのまま泊まって、翌日の日曜日に畑仕事などを手伝った。

先生は昼の農作業の疲れで、10 時過ぎになると時にコックリ、コックリをやりだす。それでも風邪で熱のあるときでもない、休みにしたり、早く切り上げたりすることはなかった。この時に微積分学を本格的に学んだことが、知的刺激の少ない環境で育った僕の数学的基礎を養う上で非常に有効だった。これを基礎に微分方程式をはじめ、他の数学分野の勉強をすれば後で苦労しないで済んだのだが、生活で苦労した大学時代に数学の勉強が中断してしまったのは、今考えると残念である。

台風や空っ風の吹き荒れるときもほとんど休みなく勉強した。12 時ごろになるとオヤツ

にさつまいもなどをご馳走していただいた。夏だと裏の畑で作っていたスイカも出た。秋には裏山で拾った栗のこともあった。先生は栗をむくのが面倒なので、自分では決して手を出さず、奥さん（千代子夫人）や和子さんに剥いてもらって食べるのが常だった。すべてに不自由な当時の状態だったが、奥さんの作った料理が舌にとろけるほど旨かった。新藤とも不思議さを話したことがある。その謎はいまだ解けていない。

裏の畑からの展望は広々として気持ちよかった。ほぼ西方の最左端には富士山が、小さいが整った姿を見せる。その右、太陽の隠れる方向には秩父連山がつらなり、少し離れて噴煙を上げる浅間山、大きくどっしりした赤城山、ほぼ真北の上越、日光の山脈の中に一際目立つ台形の男体山、右にはるかほぼ東方に一つだけ離れて筑波山まで、関東平野を巡る山々が一望のもとに見えるのだった。そしてその裾には黒々と続く松林と稲田とが、四季のとりどりの色を添えていた。冬の深夜の、月光に冷やされた山々の姿は、特に厳しい精神性さえ感じさせた。

正月には、31日から1日にかけて、忘年会と新宴会をまとめてやった。12月に我が家で殺した豚の肉を萩原の知り合いの肉屋に預けておいて忘年会に使ったのは、2年の時の暮れだったろうか。こんな時には麻雀もやった。戦前の象牙の牌だった。日本酒とワインを飲んでダウンしたのは、このときだったろう。靴べらをブーメランのように投げるコツも、二日酔いの頭で萩原から教わった。

元日の午後、隣村(中野村)の川島先生(泰ちゃん)をみんなで訪問した。酒が好きで、1時間目の授業から酒の香を発散させていた、赤ら顔の元配属大尉、柔道3段の川島先生は、常にも増して上機嫌に酔っていた。国文学を研究しているだけに、広い部屋の中には、周りの書棚から畳の上まで、足の踏み場のないくらいに小説類が積み重ねられ、散乱していた。何の話からか、両先生は男性と女性の比較論を始めた。種々の形の放物線が描ける男性器に一日の長ありなどという川島説は、紅顔の美少年(?)たちを前にした壮年の気負いだったろうか。

先生は一年中海水浴をしているように真っ黒に日焼けしていた。水泳パンツ一枚で、夏中、畑仕事をしておられたのである。僕が高校の3年の夏に行われた柿岡・筑波山方面への見学旅行の途中立ち寄った海水浴場では、長期滞在者と間違われたということだった。柿岡では、磁気観測所の所長の今道博士を尋ねられたのだが、今道先生は退官後、理科大で地球物理学を教えられるようになり、単位をいただくことになったのは奇遇である。
*家庭の事情を考えて、僕はこの旅行に参加しなかったのだが、後々まで悔やまれることだった。

先生の家には、ホルスタイン種の乳牛が一頭いた。あまり効率のよくない牛だったようだが、朝夕の乳搾りは先生の独壇場で、奥さんは牛から相手にしてもらえなかったらしい。出荷は和子さんの役目だった。先生は自転車に乗れなかったので、重い牛乳缶を荷台の両側につるして、小柄な和子さんが早朝、登校前に集荷場まで運ぶのだった。中学卒業の時だったか、牛乳会社が和子さんを表彰したと聞いた。先生は最後まで自転車に一人で乗れ

るようにはならなかった。

先生は高校の地学研究部の副顧問だった。正顧問の勅使河原先生（テシ）は化学を教えていたが、部の指導は何もしてくれず、計画を妨害する傾向さえあった。2年の時から部長をやっていた僕は、学年末に顧問の更迭を要求した要望書を門伝校長宛に出した。教頭の贅田先生（漢文を教えていた）が、人の好い温顔をしわくちやにして、非常勤講師は正顧問になれないので、この要望書は取り下げてもらいたい、と懇願するように言われた。多分、この事件が原因で、僕の3年の化学の成績は4であった。卒業時の総合成績がそのために2番になったということは、後になって漏れ聞いた。テシとあだ名されていた化学教師の心情が伺われる。

地学研究部といっても部員は数人で、館高祭（文化祭）の時にちょっとした展示をするのがほとんど唯一の活動ではなかったろうか。気象観測くらいはテニスコートの横に会った百葉箱でやっていたのだろうか。図書館の建物（旧同窓会館？）の二階の南向きの小部屋が部室になっており、書棚が置かれていた。3年になってからの或る日の放課後のこと、一人で部室にいと、開いた窓から一羽の蝶が舞い込んで、戯れるように言うまでも飛び廻っていた。思う人の心が蝶に化身して、心の想いに応えてくれているのではないかという、心ときめく空想に時の歩みの遅くなる数瞬を感じたのも懐かしい。イチモンジセセリだったと思うが、そうだとすると秋のことである。

文化祭の展示の一つに、大気温度の高度分布があった。それを見ていた中年の男の人が「宇宙空間の温度は何度か知っているかい？」と尋ねた。質問の意味を解しかねて黙っていると、「真空だから絶対零度だよ」と、その人はこともなげに言った。そういうものかなあ、という気持ちだった。

そのことはその後ずっと心の隅にこびりついてしたが、大学に入ってから、その問いと答えの無意味さに気付いた。何もない空間のオンドン定義の問題を意識しない答でそれはあった。宇宙空間が完全な真空ではないこと位、今は中学生でも知っている。このことは林先生には話さなかった。その「答」の異様さに圧倒されていたから。

樋のない先生の家の特タン屋根から、雨だれが落ちる。雨だれは軒端からだけでなく、家の中の藁蓆の上にもあちこちにシミを作ったのだったが、軒の下には土に窪みができていて、雨が降るとすぐに水溜りになった。いつだったか、雨で畑仕事のできない日に、縁側に腰掛けてぼんやりと水溜りを眺めていた。雨だれの落ちるたびに水面にできる水滴に気付いた。動きの滑らかさから、泡とは違うことに気が付いて、水玉というものを初めて見つけた。どうして水滴が水面上にでき、運動できるのだろうか。この疑問が物理学を学ぶ動機の一つになったのだと思う。未解決の問題だが、表面に異物のない液体では水玉はできないはずだというから、表面現象の絡んだ複雑な問題のようである。

勉強の後や酒を飲んだ時などに、先生は昔のことを話すことがあった。中学生の時のことか、奥秩父を縦走したのは楽しい思い出のようだった。ほとんど人に出会わなかったという。今と違って、深山幽谷であったろう。県道の話もでた。強敵を相手に、上段から打

ち込むと見せて相手を誘い、一転胴に決めた会心の試合のことである。ほとんど歯のない口を開けて破顔一笑なさる先生の笑顔が目には浮かぶ。

物理学校の授業のことも時々話題に上った。当時の教科書、と言っても箱入りの立派な本だった、が書棚に並んでいた。芝亀吉の「熱力学」伊藤徳之助の「ベクトル解析」などがあつた。岩波講座の「物理学」全巻、佐々木達治郎の本（「等角写像とその応用」だったか）などは、その後お買いになったものであろう。自然科学者としては蔵書の多いことを誇りにしておられたような面もあつた。今の我々と違い、買った本は熟読なさったであろう。国立大学に合格しなかったら、働きながら学ぶしか方法のなかった僕が、東京理科大学を選んだ最大の理由は、先生のお話を聞いてその伝統に惹かれたからだった。

先生が海軍省に入られてからの話も時々伺った。専門学校出身者の意地もあつたのか、実力では誰にも引けを取らないという自負が口ぶりににじみ出た。後に京都大学教授になった多田政忠氏のことも同僚としてでてきた。この時代の先生が持つ充実した、幸福な時代であつたのであろう。水交社の話がよく出た。酒も強かつたようだ。清酒一升くらいは平気だったという。

敗戦後の公職追放になって職を失われた。お兄さん一家と一緒に、多々良村へ開拓農民として入られた（昭和 21 年 4 月のことという）。水利の悪い、松林にしかならなかった丘陵地を畑にするのであるから大変だったろう。この松林は、大谷休泊の植林で有名な広大な林の一部であつた。誰もが苦労した時代ではあつたが、僕が教えて頂いたころも、トタン屋根からは雨漏りがし、部屋には藁蓆が敷かれていた。我々、高校生の勤労奉仕が少しは役に立っただろうか。月謝はうけつけられなかったもので、そのような形でお礼したのだった。先生ご自身の苦しい生活にもかかわらず、教えて頂いたことが、現在の曲がりなりにも物理学を研究できる基礎となっていることを考えると、心から先生に感謝する気持ちで胸が一派になるのです。

理科大学に入学し、昼間働いて夜学ぶ生活では、先生との連絡も途切れがちになった。切手代にも事欠く時代だった。とくに、1 年の夏（1954 年）に慶応高校で気象観測を主として仕事についてからは、盆も正月もない年中無休の勤務のため、帰省もできなかった。時間給 25 円、日給 200 円のアルバイトだったが、気象観測以外は机に向かって勉強できた。3 階の校舎の屋上から、晴れた日には赤城山が見えた。

先生と次にお会いしたのは、25 年たってからだった。東京理科大学の同窓会である理窓会の大学創立 100 年記念の名簿に先生のお名前を見出した。昭和 5 年理化学部 45 人のうちの一人としてお名前と現住所を見たときは嬉しかった*。

*昭和 5 年は物理学校創立 50 周年に当たり、この年の卒業生数は 123 名、その前年の在籍学生数は、1 年 2170 名、2 年 224 名、3 年 150 名と記録されている（橋高重義「物理学校の伝説」すばる書房、1982）。

すぐにお手紙を差し上げた。先生は、沼津までお出でになった機会に静岡まで足を延ばして拙宅を訪ねてくださった（1979 年 7 月 6 日）。すでに歩行の自由を欠き、しっくり合

わない入れ歯のカタカタ鳴る口から洩れる言葉は聞き取りにくかったが、眼鏡の向こうの、ガンジーに似た眼の光は相変わらず鋭く、必要なことだけ噛みしめるように語りだす口調も懐かしいものだった。旅行がお好きだったという先生の最後の旅行になってしまったのかもしれないが、市内を少しご案内した。晩年にもう少し健康を持ち続けて欲しかった。開墾時代の無理が手足や歯に障害をもたらしたのであろう。

できるだけ現代物理学に親しんでいただこうと思って、名著と呼ばれる教科書や拙いながらも自分で書いた論文などをお送りしたが、不自由な体になられてからなので、お読みいただけたらどうか。

困難な時代を幾分かでも共有し、貴重な教えを受けた者として、心から哀悼の意を捧げます。最後の時が安らかであらせられたことを喜びます。

1982.12. 6

小島英夫



林先生宅の裏の畑での一刻（1953 年秋）（前列左から、小島、萩原、後列左から、和子さん、千代子夫人、新藤、関田）

